9

信仰と生活シリーズ

パスカルに導かれて

戸口民也

Toguchi Tamiya

平山高明司教［監修］

信仰と生活シリーズ9　パスカルに導かれて　戸口民也　くすのき出版

信仰の道には導き手が重要である。宗教と無縁であった著者にとって、フランス文学のラシーヌやパスカルとの出会いは、カトリックの世界観に触れ、人生と神について深く考える契機となった。

さらに赴任先の長崎で、信仰と生活とを一致させている真摯なキリスト者たちとのかかわりを通して、家族と共に洗礼に至る道が整えられていった。

『パンセ』においてキリスト教の擁護を目指した天才パスカルの透徹した論理を軸に、著者自身の回心と信仰の喜びを誠実に語る本書は、知的な色彩にみち、成人してから入信する人への神の恵みと、それに応える人々の心境をよく表している。

くすのき出版

ISBN4-907754-09-4　C0016　¥460E
定価（本体460円+税）

9
信仰と生活シリーズ

パスカルに導かれて

戸口民也
Toguchi Tamiya

平山高明司教［監修］

くすのき出版

人間は一本の葦にすぎない。自然の中でもっとも弱いものである。だが、それは考える葦である。これを押しつぶすには、全宇宙が武装する必要はない。一吹きの蒸気、一滴の水だけで、殺すには十分である。だが、たとえ宇宙が押しつぶそうと、人間は彼を殺すものよりも尊いだろう。なぜなら人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分よりもまさっていることを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、われわれの尊厳のすべては考えることにある。われわれが立ち上がらねばならないのはまさにそこからであって、われわれが満たすことのできない時間や空間からではない。だから、よく考えるようにつとめようではないか。そこに道徳の原理がある。

（ブレーズ・パスカル『パンセ』　B三四七、L二〇〇）

凡例

『パンセ』の引用にあたり、（　）内に版とその分類番号を示した。

例、「クレオパトラの鼻」（B一六二、L四一三）

Bはブランシュヴィック版を、

Lはラフュマ版を表す。

パスカルと『パンセ』については、巻末の解説を参照。

はじめに

幼児洗礼の人にとっては、信仰は生命とともに与えられたものでしょう。しかし無信仰の環境で生まれ育った人間には、それは自分の意志で、努力して見つけ出すしかないものです。

もちろん信仰は神の恵みですから、人間の努力だけで獲得できるものでは、実はありません。それは、すでに恵みとして神から私たちすべてに与えられているものです。

ただ、信仰を知らずに育った人間は、そのままではこの恵みに気づくことができません。それに気づかせてくれる導き手が必要です。しかし、それと同時に、内的な欲求（私たちの心の中には神を求めようとする欲求が必ずあります）に従い、神を見出そうとする私たち自身の意志と努力が伴わなければ、導き手も私たちを導くことができません。神は人間を自由なものとして創造されまし

たから、人間が自由な意志で神を求めることを望まれます。「全ては神によってなされるが、私たちなしでは何もなされない」（シュヴロ『シモン・ペトロ』）のです。

実際に、もしも導いてくれる人がいなければ、私は信仰に至ることはできなかったでしょう。私の第一の導き手はパスカルでしたが、その出会いから信仰にいたるまでには、二〇年の時間と、さらに何人もの人との出会いが必要でした。信仰は人から人へと伝えられるものであるということを、私自身の経験からお話ししたいと思います。

目次

はじめに

第一部　パスカルとの出会い

私の生い立ち　9
ラシーヌとの出会い　13
悲劇的世界観　19
パスカルとの出会い　22
パスカルの賭　24
神なき人間の悲惨　32

第二部　人間という存在

二つの無限　35
この無限の空間の永遠の沈黙　38
理性の役割　48
信仰と理性　51

第三部　人との出会い

岩瀬孝教授　55
山田さん夫妻　57
結婚　60
マリアテレサ・バルデス先生　62
カトリックへの親近感　63
精道学園　65
聖ホセマリア・エスクリバーの教え　69
肯定的に考える　73
喜びと平和　76

第四部　賭に踏み切る

カトリックの教えを学ぶ　80
長与教会と岩永四郎神父　86
受洗　89
いのちは神の恵み　90
召し出しと回心　92
ポルティーリョ司教のすすめ　96

おわりに　100
パスカルと『パンセ』について　103
表紙の筆跡は、パスカル自筆による「考える葦」の前半部分
表紙デザイン＝中沢紀子

第一部　パスカルとの出会い

私の生い立ち

私が生まれ育ったのは神奈川県のほぼ中央部に位置している大和（やまと）という町です。相模（さがみ）台地の平坦な土地で、はるか西には丹沢山系が見えるというところでした。

田園というしゃれた言葉よりは、相模の殺風景な田舎と言ったほうが良いのですが、もうひとつ特徴がありました。それは、厚木基地に隣接する基地の町だったということです。終戦直後、マッカーサーが最初に降り立った場所といったらお分かりでしょうか。厚木基地は、戦前は帝国海軍航空隊の基地、そし

て戦後は長い間アメリカ海軍の航空基地として使われていました。今は海上自衛隊の基地となっています。

私は一九四六年生まれですから、古い言い方だと「純粋戦後派」にあたります。戦前・戦中のことはもちろん経験していませんし、戦争直後のことも記憶には残っていません。覚えているのは昭和二〇年代の後半あたり、つまり一九五〇年代以降のことですが、私の子供時代の大和は、畑や雑木林、原っぱがあちこちにある田舎という顔と、上空にはアメリカ海軍の戦闘機、爆撃機、偵察機、輸送機がひっきりなしに飛び、地上ではアメリカ兵が大勢歩きまわっている基地の町の顔、それにやがて首都圏郊外のベッドタウンへと変わってゆこうとする町という三つの顔を持った町でした。

基地の町には「無国籍」「自国の中の外国」という特徴があります。また、郊外のベッドタウンは、その土地に根ざした人間や文化とは無縁の、それまではお互いまったく知らないもの同志だった人々が移り住んでできたもので、その

特徴は「根なし草」「よそ者」の町ということです。

私の両親も土地の人間ではありませんでした。父は埼玉の山林地主の次男坊で、東京の大学を出てからそのまま都会に残り、その後大和に移ってきました。当時の田舎の次男・三男以下によくあるパターンでしょう。母の家も、東北の田舎から出てきた「たたき上げ」の祖父が神奈川県藤沢に落ち着いて一家を構えた、という背景をもっています。ですから大和は、私の両親にとって、もともと縁もゆかりもない土地だったということになります。

両親とも、その後ずっと大和に住み続け、そこで一生を終えましたが、どちらも近代日本の都市とその周辺部の住民の大多数をしめる「故郷喪失者」でした。私自身も、大和から離れて三〇年になりますが、正直なところ、この町を自分の「故郷」とは思いにくいのです。というのも、大和は私がそこに「根付く」以前に去ってしまった町ですから。それに宅地化が進んだため、子供時代に見慣れていた畑や原っぱや雑木林もほとんどなくなってしまいましたし、丹

沢山系も今では家並みにさえぎられて見えなくなってしまいました…

そんな町の、よそ者の核家族の家庭でしたから、土地のしきたりとも伝統とも無縁でした。「故郷喪失者」の家庭の多くがそうであったように、私の家も宗教的な雰囲気は無いに等しいといってよいものでした。初詣や盆も父や母の実家に帰ったときだけのことで、自分の家ではほとんどなにもしませんでした。私はそんな家庭で、信仰とはまったく無縁のまま育ちました。

小学校と中学校は大和の公立の学校、そして高校は横浜市の県立高校に通いました。高校時代までは、信仰に関わることについては、とくにこれといった出会いも事件もありません。唯一例外といえるのは、小学校の高学年から中学時代にかけてだったと思いますが、宇宙の無限や永遠の時間のことを真剣に考えるようになったということでしょう。ただし、このことについては後で改めてふれることにしたいと思います。

ラシーヌとの出会い

出会いと呼べることは、大学時代におこります。その第一はジャン・ラシーヌ（Jean Racine 一六三九―一六九九、フランスの悲劇作家。代表作は『アンドロマック』『フェードル』）との出会いです。今思えば、これが第一で、しかもパスカルとの出会いとともに、私の人生に決定的な影響を与えた出会いだったといえるでしょう。

というのも、ラシーヌを通じてパスカルと出会い、またラシーヌを通じて恩師に出会ったからです。この恩師は私がはじめて親しく接することになるカトリック信者でもありました。多くの人との出会いの中で、信仰と関わるものとしては、この恩師との出会いが最初の出会いとなります。

さらに、ラシーヌを通じて私は研究の面白さを知り、大学院に残りました。修士課程を終えてすぐ長崎にやってきてフランス語の教師になったのも、研究

ラシーヌ（1639〜1699）

を続けるためでした。もしも長崎に来ていなかったら、私は家内と出会うことはなかったですし、私たち家族を信仰へと導くことになる様々な人々と出会うこともなかったでしょう。おそらく私は洗礼を受けることはなく、まったく違った人生を生きていたはずです。

ラシーヌと出会ったのは大学二年の秋か冬だったと思います。「四季」という劇団をご存知でしょうか。最近では『キャッツ』や『オペラ座の怪人』などで有名ですが、当時はジロドゥーやアヌイといったフランスの劇を好んで上演していました。

その劇団四季がラシーヌの『アンドロマック』を上演するというのです。私は卒業論文にどの作家を選ぶか、大学に入ったときから探し続けていました。

ラシーヌにも関心があったので、早速見に行ったのですが、実に面白いと思いました。ドラマは台詞（せりふ）が中心です。派手な立ち回りはもちろんありませんし、俳優の動作もきわめて抑制されていて、すべては言葉によって表現される――まさに文学史で習ったフランス古典劇がそこにありました。常に抑制をきかせながら、時には抑えきれぬ情熱ゆえに激しく、しかしあくまで格調高く語られる台詞に、私は感動しました。言葉によって、ほとんど言葉だけによって強烈に表現される人間の情熱と、その情熱ゆえに狂わされた人間の運命に感動したのです。

三年の秋には卒業論文のテーマと指導教授を決めるのですが、私は迷わずラシーヌを選び、フランス古典劇の専門家である岩瀬孝教授のゼミに入ることにしました。この岩瀬先生が先ほどふれた恩師、私がはじめて接したカトリック信者だったのです。

とはいっても、そのときはまだ信仰のことを深く考えたわけではありません。キリスト教、それもカトリックの教えを知らないとフランス文学はわからない、とくにラシーヌやパスカルはどうにもならないということは知っていたので、知識として、カトリックのことを勉強しはじめました。

少し専門的な話になりますが、しばらく我慢しておつきあいください。

ラシーヌもパスカルも「ポール・ロワイヤル」と深いかかわりを持っています。ポール・ロワイヤルというのは、そもそもはパリ郊外にあった女子修道院でしたが、やがて「ジャンセニスム」（Jansénisme オランダの司教ヤンセン Jansen〔一五八五―一六三八〕による恩寵と救霊予定説に関する神学上の学説、およびその流れをくむ思想・宗教運動。とくにフランスで大きな影響をもった）と呼ばれる宗教運動の中心となりました。ポール・ロワイヤルは、狭い意味では女子修道院なのですが、これに賛同し、信仰に生きるため世間から離れて修道院の周辺に隠遁生活をする人々まで含む集団全体もさすようになりました。

ジャンセニスムの考え方は、人間の罪深さと神の恩寵（神の恵み）の絶対性を強調するあまり、人間の自由意志や善業の功徳をほとんど否定しそうなところにまでいったため、異端視されたりもしましたが、貴族や行政・司法関係の有力ブルジョワの間には根強い信奉者を得ていました。というのも、ポール・ロワイヤルに集まった人々は当時のフランスを代表する教養人・知識人で、彼らは高潔な人格と信仰の深さとで尊敬されていたからです。パスカルの一家もそうでした。パスカルの妹はポール・ロワイヤルの修道女となり、またパスカル自身もポール・ロワイヤルの有力メンバーの一人となります。

当時のフランスには、一方ではプロテスタント、もう一方では無神論者や「自由思想家」（信仰に対して否定的あるいは懐疑的な考えの持ち主で、その中には放埒無頼な生活を送る人々も多かった）など、カトリック教会と対立する勢力が無視できぬ力をもっていました。しかしカトリックの側にも宗教的な情熱が高まった時代でもありました。ポール・ロワイヤルはフランスにおけるそうした宗教的

情熱の現われのひとつです。政治的にも思想的にも、また文学的にも、非常に大きな影響を、当時のフランスだけでなく、後世に対しても与えました。

ラシーヌは幼くして孤児となり、ポール・ロワイヤルに引き取られて成長しました。ラシーヌの教養も知識も、すべてポール・ロワイヤルで得たものです。パスカルはラシーヌよりも上の世代に属しますが、ポール・ロワイヤルの強い影響を受けて回心し、信仰生活に入りました。有名な『パンセ』は、無神論者や自由思想家に対して信仰を擁護し、彼らの回心を促すことを目的として準備されたものです。ただ、パスカルの死によって試みは未完成に終わり、現在私たちが読むことのできる『パンセ』は、パスカルが残した原稿をもとに編纂されたものです。

ラシーヌをより深く理解するためにはパスカルも知らねばならない。そう考えて、私はパスカルにも近づきました。パスカルの『パンセ』は、当時の無神論者だけでなく、三百年後の日本に生きる私にも影響を及ぼすことになったわけですが、それについては後で述べることにし、ラシーヌのことをもう少し続けたいと思います。

悲劇的世界観

ラシーヌは一七世紀後半に活躍した、フランスを代表する悲劇作家です。

ラシーヌが活躍した一七世紀後半といえば、太陽王ルイ一四世の時代、ヴェルサイユ宮殿が建設され、フランス古典主義の絶頂期でもありました。しかし、ラシーヌの悲劇には、ヴェルサイユの華麗な宮廷生活とは反対に、人間の偉大さよりも人間の悲惨の方が色濃く描かれています。人間は情念に支配される存在である。人間の意志は弱く、情念を支配することはできない。だから人間は、理性や意志によって善を求めようとしても、結局は情念に引きずられて悪をなしてしまうのである…

悲劇の世界には、人間の偉大さや惨めさは描かれますが、そこには根本的な救いは決してもたらされません。『オイディプス』や『アンティゴネー』といった古代ギリシャの有名な悲劇を例にとって考えてみても、そこで人間の傲慢が戒められていたり、人間という存在の不可思議が表現されてはいるものの、それで人間が救われるかどうかということになると、答えはありません。いや、答えがない問いを投げかけることがむしろ悲劇の本質なのだ、と考えた方がよいかもしれません。

悲劇は人間の偉大さと悲惨を教えてくれます。しかし、人間が存在する意味は教えてくれません。この世界には幸福と不幸が、善と悪があること、人間は善と幸福を求めているはずなのに、悪を行い不幸に陥ること、人間の運命は不条理であり、この世界のありようは矛盾に満ちた謎であることを示すのですが、なぜそうなのかは教えてくれません。つまり、人間にとって自己の存在の根本に関わる切実な問いを投げかけはするのですが、答えは与えてくれないのです。

問いはいつまでも問いのまま残り、謎は解かれることがありません。

ラシーヌに関わるようになってから、私はラシーヌの作品だけでなく、古代ギリシャ・ローマ悲劇から、近代ヨーロッパの悲劇、さらには現代の悲劇についても調べたり考えたりするようになりました。演劇のジャンルとして、あるいはもっと広い意味での「悲劇的なるもの」についても考えましたが、哲学や思想として突き詰めようとしても、悲劇はいつも答えを示さぬまま逃げていってしまう――そんな印象がいつもありました。

一方、これもラシーヌやパスカルとの関わりからですが、キリスト教、とくにカトリックの教えについても、聖書やアウグスティヌスを読んだり、カトリック要理を読んだりもしました。ラシーヌもパスカルも、異端的とは言われるものの、カトリック世界の真っ只中の、しかも熱烈な信仰＝宗教的情熱をもったポール・ロワイヤルと深いかかわりをもって生きた人たちです。

パスカルとの出会い

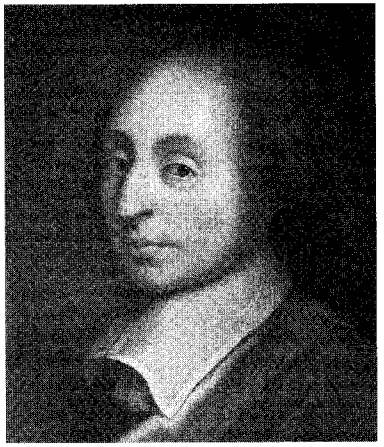
パスカルとの本格的な出会いは、ラシーヌとの出会いから間もない頃でした。名前は早くから知っていましたし、大学の仏文科に入ってからは「考える葦」（B三四七、L二〇〇）や「クレオパトラの鼻」（B一六二、L四一三）といった有名な断章を原文で読む機会もありました。

しかし、腰を据えて『パンセ』を読み始めると、ラシーヌをやるついでに片手間につきあえるような人物ではないことに気づきました。パスカルという人間にもその思想にもひきつけられました。ですから、テキストだけではなく、参考文献もずいぶん手に入れて読んだつもりです。

ただしその時は、宗教や信仰の問題よりも、人間についての洞察や、ジャンセニスム的な世界観というところにポイントを置いて読んでいました。

たしかに『パンセ』のなかでも、人間や人間社会について考察している断章は、キリスト教徒でなくとも「とっつきやすい」ところがあります。鋭く深い洞察が見事な文章で表現されていて、まさに文学的テキストとしても大変魅力的なのです。

しかし、キリスト教の教えや聖書について語っている断章や、ユダヤ教とイスラム教との比較を論じている断章などは、キリスト教とくにカトリックの教えを知らないと、理解しにくいところがあります。普通の日本人読者にはとっつきにくい部分と言っても良いでしょう。


ブレーズ・パスカル（1623〜1662）

私もその部分は一応読みはしましたが、長いこと敬遠してきました。しかし、どうしても「ひっかかった」のが、「パスカルの賭（かけ）」（B二三三、L四一八）と呼ばれている断章です。

パスカルの賭

「パスカルの賭（かけ）」と呼ばれている断章は、詳しく読むといろいろ難しいところがあるのですが、そのポイントをおおまかにまとめると、次のように言うことができるでしょう。

この断章には、パスカル自身を思わせる人物（とりあえず「彼」としましょう）と、信仰とは無縁の生き方をしている人物（こちらは「私」としておきましょう）とが登場します。そして、ごくおおざっぱにまとめると次のような対話がなされます。

彼「神は存在するか、しないか。君はどちらに賭ける？」

私「いや、どちらかを選べということがまちがっている。正しいのは賭けないことだ。」

彼「そう。だが、賭けなければならない。君は船に乗り込んでいるのだから。」

賭けないほうが良いと「私」は主張しようとするのですが、そうはいかないのだと「彼」はいいます。なぜなら、賭けないということ自体が、結果的に一つの選択となるからです。もしも「私」が神は存在しないかのごとく生き続けるのであれば、結果として神は存在しないという方に賭けるのと同じ意味を持つのだ、というわけです。簡単に要約すると、「彼」は「私」をこんなふうに説得します。

賭け金は君自身の人生だ。神が存在するという方に賭けたとしよう。勝てば君は永遠の生命と無限に続く喜びを得ることになる。しかも、君の人生は意味あるものとなるだろう。賭けに負けたとしても、失うものは何もない。

反対に、神は存在しないという方に賭けたとしよう。その場合、たとえ賭けに勝っても、君の儲(もう)けは現世の幸福だけである。死後は虚無とみなすわけだから、そこで得られるものは何もない。逆に負けたとき、損失はあまりに大きい。来世の幸福をすべて失うことになるからだ…。

はじめて『パンセ』のこの断章を読んだとき、正直なところ、これは困ったと思いました。逃げ道はふさがれているからです。賭けたくないと言い張っても、そう言うこと自体が実際にはすでに選択を意味するとなると、もう賭けるしかありません。しかも、理屈から言えば、どちらに賭けるべきかは明らかです。

しかし、たとえ頭ではそう理解しても、人はそれほど簡単に賭けに踏み切れるわけではありません。何故でしょうか。

第一の理由は、キリスト教の神がほんとうに真の神なのか、という疑いが残っていたためでした。

神が存在するか否かという問いと同様に、どの宗教、どの宗派、会派を信じたらよいのかという問いに対しても、答えようとすれば、それは賭けにならざるを得ません。世界にはさまざまな宗教があります。キリスト教、イスラム教、仏教は、世界の三大宗教と呼ばれていますが、そのどれが真の宗教なのでしょうか。あるいは、真の宗教はそれ以外にあるのでしょうか。また、それぞれの宗教はさらに宗派や会派に分かれていますが、そのどれが正しいのでしょうか。

私は学生時代、仏教にも関心をもったことがあります。禅寺を訪ねてみたり、仏教の中ではキリスト教に近いといわれる親鸞(しんらん)の『歎異抄(たんにしょう)』を読んだりもしました。ただ、私が求めるものではなさそうだと感じ、それ以上踏み込むことはありませんでした。

はっきりとそう意識してはいなかったと思いますが、仏教の仏たちも古代ギ

リシャの神々も、信仰の対象となる絶対的存在としての「神」であるとは、私には感じられませんでした。ですから、パスカルの「賭」がきっかけとなって「神は存在するか」と私が自らに問いかけたとき、その神は実はパスカルが信じる神、キリスト教の神だったのだと、今振り返ってみるとわかります。「永遠の生命」や「無限に続く喜び」というのも、よく考えれば、すぐれてキリスト教的なものですから。

ただ、そのときはまだ、たとえば仏教もあるのに、キリスト教だけに焦点を絞って考えることがはたして正しいのか、という疑問が残っていたことも確かです。だから、賭けることにためらいを覚えたのでしょう。いや、それを口実に、あとでふれるように「逃げて」しまったと言ったほうが実は正しいかもしれません。不可知論の誘惑と言うこともできるでしょう。

第二には、現代日本の精神風土からの影響があります。

日本人にとってなじみの深い宗教は仏教か神道でしょう。しかし、日本人の大多数は、宗教的な感情は持っているにしても、信仰を生活の中で実践している人はほとんどありません。とくに第二次大戦後は、軍国主義への反動から、道徳も宗教もすべてひっくるめて否定するような風潮が蔓延したため、今や普通の日本人は、共産主義者よりも無神論的、唯物論的な生活を、しかもイデオロギーもなければ理想もない生活を送っているといってよいでしょう。そういった風潮の中では、神が存在すると考えること自体が突拍子もないことのように感じられてしまいます。キリスト教的な神の概念そのものが普通の日本人には理解しにくいうえに、神の存在を問うというような、西欧的な神学・哲学の伝統ともまったく異質な社会ですから、そういう発想自体がなかなか出てこないのです。

日本では、カトリック・プロテスタント・正教会のすべてをあわせても、キリスト教徒の数は人口の一パーセントにも達しません。それに、キリスト教は

長い間弾圧の対象とされてきました。明治の初めに禁教令はなくなりましたが、キリスト教徒に対する偏見は根強く残り、とくに軍国主義の時代から第二次大戦の終わりまでの時代には迫害もありました。キリスト教的な伝統は、残念ながら日本には根付いてはいません。

そればかりではありません。宗教に対する偏見や誤解から、宗教は自由を奪うもの、非人間的なものと思い込む人が日本には多いのです。一九世紀ヨーロッパのいわゆる「科学主義」「実証主義」の偏見に、宗教は阿片だと決めつけるマルクス主義のイデオロギーが加わってできあがったのが、今日の平均的日本人の意識を支配している宗教観のように思えます。

そうした風潮に逆らって、神の存在や信仰の問題に正面から取り組むには、切実な内的欲求が必要でしょう。それなりの関心はあったとしても、当時の私にはそこまでの切実な思いはありませんでした。

そして最後の理由は、今の生活のままでいるほうが自分には都合が良いから、今の生活をやめたくないから、という気持ちが強かったからです。神は存在するという方に賭けてしまうと、生活を改めなければいけなくなります。そうするには、相当な覚悟が必要です。

パスカルの「賭」に登場する不信仰の人物が賭けることをためらうのは、あたかも神が存在しないかのように生きるほうが都合が良いからです。良心の声を無視し、快楽におぼれ、放縦気ままな生活を続けても、もしも神が存在しないのなら、それを罰せられることはない――少なくとも人間の法律で裁かれさえしなければ良いのだ――ということになるからです。

放蕩生活ではないとしても、気ままな暮らしになじんだ人間には、信仰生活はひどく堅苦しく、不自由なものに思えます。なぜなら、信仰生活は神に従うことを最優先にする生活ですから、気ままま（つまり自己中心）とは正反対のものです。だから、文字通り、生活を改めねばならないでしょう。当時の私には

そこまでの覚悟はありませんでしたから、深く考えることを止めて、逃げてしまったのです。

神なき人間の悲惨

しかし、ラシーヌやパスカルとのつきあいをその後も続けていけばいくほど、『パンセ』のなかにある「神なき人間の悲惨」（B六〇、L六）という言葉が気になるようになってきました。

私の専門はラシーヌと一七世紀フランス演劇なので、調べたり論文を書くのはもっぱらその関係のことです。長崎に来てフランス語の教師をするようになってからも、パスカルとのつきあいは続けていましたが、それは専門と言うよりはむしろ個人的関心からでした。

ただ、ラシーヌは悲劇作家ですから、ラシーヌについて考えたり書いたりするときは、どうしても悲劇がテーマになります。すると、当然のことながら、神（神々）と人間との関係、人間の運命、人間の偉大さと悲惨といった問題にふれざるを得なくなります。パスカルの『パンセ』とも関わらざるを得なくなるのです。

ラシーヌの悲劇には、人間の偉大さよりも人間の悲惨の方が色濃く描かれています。ラシーヌ悲劇に登場するのは（古代ギリシャ悲劇でもそうでしたが）、人間に救いをもたらす神ではなく、人間を破滅へと導く残酷な神々です。ラシーヌは、悲惨な運命を受け入れる人間を描きながら、同時に、真に救いをもたらしてくれる神をもたない人間の悲惨を描いてもいるのではないか…

そう考えているうちに、結局はパスカルにもどってしまうのです。

私がこだわっていた問題について、もう少しお話してみたいと思います。それは、もしも神が存在しないとしたら、世界は、私たち人間はどうなるのか、という問題です。パスカルの『パンセ』にふれながら、しばらく考えてみまし

よう。

第二部　人間という存在

二つの無限

『パンセ』のなかに「人間の不均衡」（B七二、L一九九）と題された長い断章があります。その内容から、「二つの無限」と呼ばれることもあります。広大な宇宙空間とミクロの世界について語りながら、これら二つの無限の中間に位置する人間とはいかなる存在かを考察した断章です。パスカルの文章そのままではありませんが、その論旨を私流にまとめると、こんな風になります。

まず天を眺めてみよう。太陽が描く広大な軌道に較べれば、地球など「ひ

とつの点」にしか見えないだろう。だが太陽の軌道にしたところで、天空をめぐるもろもろの天体の軌跡からみれば「針のあと」にすぎない。しかも宇宙はその先にまで広がっていて、われわれの思考も想像力も宇宙の無限をとらえ尽くすことはできないのである。

次にミクロの世界に目を転じてみよう。例えばダニはどうか。このちっぽけな動物にも人間同様に関節のある脚があり、「その脚の中には血管、血管の中には血、血の中には液、液の中にはしずく、しずくの中には蒸気」がある。目に見えるかどうかという小動物の体内に小宇宙があり、その小宇宙の中にさらに微小世界が存在すると考えたら……人間は「この同じように驚くべき不可思議、微小と広大の不可思議のうちに、呆然自失する」ほかない。

二つの無限についての考察は、パスカルがこの文章を書いていた時代、つまり一七世紀の半ば頃にあっては、最先端の科学者、学問知識の最前線にいる

人々だけがなし得ることでした。望遠鏡と顕微鏡が発明されたのは一六世紀末から一七世紀初めにかけてのことですが、この二つの発明によって、人間の視野は地上の可視的世界から、広大な宇宙空間とミクロの世界という「二つの無限」に向かって大きく開かれたのです。

無限大と無限小の体験的発見とでも言えばよいでしょう。

望遠鏡によって人はそれまで肉眼では見ることができなかった宇宙の遙か彼方の天体も観察できるようになりました。宇宙の広大さと、それに比較したときのわれわれの住む地球の小ささとを、思い知ったのです。

人はまた、顕微鏡によってダニのような微小生物の体内にも、人間の身体と同様に関節や血管があり、血液が流れている様子を目の当たりにしました。肉眼ではとらえられないような微小生物の体内にも小宇宙と呼べるようなものが存在することを知ったのです。

ところで、自然の中に人間を置き、望遠鏡や顕微鏡で観察するかのごとく眺

めてみたら、どんなふうに見えるでしょう。科学者パスカルは、二つの無限の真っ只中におかれた人間の姿を、次のように描いてみせます。

無限に対しては無、無に対してはすべて、無とすべてのあいだの中間者で、両極をとらえるには無限に遠く隔てられている。（B七二、L一九九）

では、人間はどこに自らの支えを見いだしたらよいのでしょうか。しかし、パスカルが投げかけた問いをもう少し考え続けてみましょう。

この無限の空間の永遠の沈黙

この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる。（B二〇六、L二〇一）

たった一つの短い文からなる、有名な断章です。わざと直訳調に翻訳をしましたが、フランス語で読むと、主語が異様に重い、頭でっかちで、しかも最後は動詞でぷつんと終わってしまう、不安定極まりない文です。そして、その不安定さが、読者の精神的な不安をかきたてる効果をもつのです。

この恐怖の叫びは、パスカル自身のものと思われるかもしれません。「うめきつつ祈る天才」というロマン派的なパスカル像に親しんだ人には、とくにそう感じられるでしょう。ポール・ヴァレリー（Paul Valéry一八七一―一九四五、フランスの詩人・評論家）はこれに反発し、追いつめられた動物のような悲鳴はキリスト者にふさわしくないと非難したほどです。

しかし私は、むしろ神なき人間の恐怖や戦慄を、この断章から読みとるべきだと考えています。パスカルは、無神論者や「自由思想家」（一七世紀当時の表現で、信仰とは無縁の、しばしば放蕩無頼な生活を送っている人々）にむかって、こう問いかけているようです。もしも君が言うように神が存在しないとしたら、宇宙

の無限や永遠について考えてみたまえ。人間を支えてくれるものは一体どこにあるのか…

これには、無神論者もたじろぐのではないでしょうか。それとも、「私にはそんな支えは必要ない」と言い張るのでしょうか。

ここで、私の子ども時代の経験に触れさせていただきたいと思います。

小学校の高学年から中学生になったころでした。宇宙のことを学校で習ったり、本を読んで知ったりしたのがきっかけだったと思いますが、宇宙の無限とか永遠に続く時間とかを考えるようになりました。それとともに、生まれる前の自分はどうだったのだろうか、死んだ後の自分はどうなるのだろうか、気になるのです。昼間は意識していませんが、夜になると頭に浮かんできます。しかし、いくら考えても分かりません。考えているうちに、眠れなくなって、不眠症になりかけました。

とくに恐ろしかったのが、死んだ後、自分の意識はどうなるのかと考えたときです。祖父はどちらも私が生まれる前に死んでいましたが、祖母の死は見ていましたので、人は死んだ後、体は墓に埋められると知っていました。父方の祖母は土葬、母方の祖母は火葬でしたから、土葬の場合には、埋められた体はやがて棺の中で腐敗し、最後はほとんど骨だけになってしまうこと、火葬の場合はすぐに燃やされて骨と灰だけになって埋葬されるということは、知識と体験を通じて知ってはいました。

しかし、分からなかったのは人間の意識がどうなるかということです。私の意識は、肉体の死とともに消滅してしまうものなのか、それとも意識だけはあり続けるのか――それが問題でした。もしも意識が消滅してしまうのであれば、まさに私という存在は、この世界、この宇宙から事実上「完全に」消滅してしまうことになります。骨や灰になってかろうじて残っている私の肉体の一部は、もはや私とは考えられません。それは、生きて存在していたときの私とは、も

はや何の関わりもない、ただの「物」でしかありません。

とすれば、死はまさに「滅び」そのもの、肉体だけでなく、精神も心も意識も、肉体と共に無に帰すということになります。私はあとかたもなくなり、しかも私がなくなってしまったことを意識することもはやできないのですから、これこそ究極の虚無です。しかも、宇宙は「私なしで」存在し続ける…そう考えるのは実に恐ろしいことでした。真剣に思い悩んだものです。もちろん、いくら考え、思い悩んでも、答えは得られませんでしたが。

そのときの私は、霊魂という言葉は思い浮かべていなかったようですが、じっさいには霊魂の存在について（その当時はむしろ霊魂の不在について）考え、思い悩んでいたと言っても良いでしょう。

ところで、さきほど紹介した「人間の不均衡（二つの無限）」（B七二、L一九九）の直前（ラフュマ版配列による）の断章は、「この無限の空間の…」という断章と響きあう、次のような言葉で始まっています。

人間の盲目と悲惨をながめ、沈黙する全宇宙と光もなくひとり見捨てられた人間、誰が自分をそこにおいたか、何をしに自分は来たか、死んだらどうなるかも知らず、何ひとつ認識できぬまま、宇宙のこの片隅で途方に暮れているような人間を見つめるとき、私は、眠っているあいだに恐ろしい無人島につれてこられ、目覚めると自分がどこにいるかわからず、そこからのがれる手段もない人のように恐怖におそわれる。そして私は不思議に思う、かくも悲惨な状態にあるのに、なぜ人は絶望におちいらずにいられるのかと。

（B六九三、L一九八）

空間の無限を意識するとき、人はいつのまにか時間の無限をも意識してしまうようです。ひとつ試しに、果てしない宇宙についてしばらく考えてください。知らぬ間に、限りなく続く時間のことを考えている自分に気づくはずです。そ

して、空間と時間の「二つの無限」に呑み込まれてしまいそうな人間という無力な存在について思いめぐらしている自分自身に気づいて、愕然とすることでしょう。

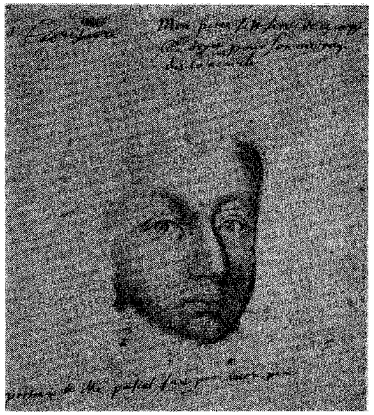
実際に、永遠という無限の持続と較べれば、私の生涯は束の間にすぎません。私が現に生きている今という時間は無に等しいものです。そう意識するとき、パスカルの次のような問いを、自分自身に問わずにはいられなくなります。

私の束の間の生涯がその前後に続く永遠の前に吸い込まれてゆくことを思い、私が満たし私が見ているわずかな空間が、私の知らない、私を知らない無限に広大な空間の中に没してゆくことを思うとき、私は恐ろしくなる。そして私がそこではなくここにいることに驚く。なぜそこではなくここなのか、その時ではなく今なのか、何の理由もないからである。誰が私をここにおいたのか？誰の命令、指図によって、この場所この時が私に定められたのか？

（B二〇五、L六八）

たしかに私は、今ここに、こうして生きています。でも、いったい何のためでしょうか。死んだ後は、どうなるでしょうか。『パンセ』のこれらの断章は、まさに子ども時代の私が経験した恐怖を思い出させるものでした。

もしも唯物論――つまり神も霊魂も存在しないという思想――にたつなら、人間は死んでしまえばそれきりです。霊魂がないのですから、ただ消滅するだけでしょう。もちろん、私の肉体をつくっていた物質は、腐敗し、分解され、形を変えて存在し続けるのかもしれませんが、それはもう「私」ではありません。ですから、この私は、実質的には消滅すると考えるほかないでしょう。そして、私が「私」であることを認識



パスカルの肖像画。同郷の親友ジャン・ドマが描いたもの。

せしめていた私の「意識」も「思考」も、肉体の死と共に消滅してしまうはずです。まさに、あとは何もない虚無です。とすると、私は何のために存在しているのでしょう。何のためにこの世に生まれ、自分の人生を生き、そして死ぬのでしょうか。私の存在には何の意味もないのでしょうか。

唯物論では神の存在を認めませんから、もちろん救いもありません。とすれば、この世界＝宇宙がはるか昔から存在していることは「科学的」知識として知ってはいても、私にとって世界が意味あるものとして存在するのは私が生きている間だけのことになるでしょう。私が生まれる以前と死んだ後は、たとえ宇宙がそれ自体としては存在しようと、私にとっては存在しないのと同じで、何の意味もないことです。

とすれば、私にとって意味があるのはこの人生、生きている間だけのこととなります。ならば、好きなことをして生きればよいわけです。来世など存在しないのですから、良いことをしても悪いことをしても、どちらの場合にもその

「報い」はありません。だから、極端に言えば、「すべては許される」ということになります。

ドストエフスキーを読む人は最近は少ないかもしれませんが、彼の作品のある主人公が口にする「もしも神が存在しないのなら、すべては許される、殺人もだ」というテーゼは、私の学生時代には（別に文学部の学生に限らず）、深刻な問いとして受けとめていた学生が少なからずいました。念のために付け加えますが、これは作家自身の思想では決してありません。小説の中のある登場人物がそういう思想に取り憑かれ、殺人を犯してしまう、というものです。

もしも無神論や唯物論を信じるなら、私の身体は死後腐敗するか、あるいは焼かれて灰となって、やがて私という存在はあとかたもなくなるでしょう。では私の意識は、私の心、私の精神はどうなるのでしょうか。それも肉体と共に消滅してしまい、あとは「この無限の空間の永遠の沈黙」のみが支配するのでしょうか。

もしもそうなら、私には恐怖と絶望しか残らないでしょう。なぜなら、私という存在のすべては無に帰すということ、したがって私の存在には何の意味もなかったということになるのですから。

いや、そうではない。君の存在に意味を与える「存在」がたしかにある。だから君はその「存在」に賭けなければならない、とパスカルは答えます。

理性の役割

「神は存在するか？」科学はこの問いに答えを出すことはできません。そもそも宗教は、自然を超えた次元に属するもの、つまり超自然のものですから、自然すなわち「創造されたもの」を対象とする科学は、自然を「創造」した「存在」を捉えることはできないのです。神の存在を、あるいは霊魂の存在を、科学的な実験や分析によって証明することは不可能です。

しかし、科学的証明が不可能だからと言って、神は存在しないと断定することはできません。見えるものしか信じないと主張する人がもしもいるとしたら、あなたの主張する根拠を私がよく見えるように、今ここに示してほしいと、逆に問い返したいと思います。パスカルが言うように、「理性を排除すること」も「理性だけしか認めないこと」も、共に「行き過ぎ」（B二五三、L一八三）です。同様に、見えるものしか信じないというのも、現にそこに見えているものをそれと認めないのと同じように、共に間違った思い込みというべきでしょう。

「理性の服従と行使、そこに真のキリスト教がある」（B二六九、L一六七）とパスカルは言います。信仰に近づくためには「理性を行使」しなければなりません。しかもその上で、「理性を超えるものが無限にある」（B二六七、L一八八）ことを認め、心で信仰を受け入れる必要があると。なぜなら「神を感じるのは心（心情）であって理性ではない。信仰とはそのようなものである」（B二七八、L四二四）からです。

それに、私たちの心の中には、何かを信じたいという欲求が生まれながらにしてあります。

そもそも信じるというのは人間の根源的な行為です。もしも何も信じないのなら、それこそ私たちは生きてゆくことができないでしょう。たとえば、無神論者は神が存在しないと信じている、あるいはそう信じようとしている自分を信じているわけです。幼い子どもが自分の親を（小さいうちは無意識的にでも）信じなければ、その子はどうやって生きてゆくのでしょう。人から教えられたことや自分が観察して学んだことを、その通りだと信じなければ、私たちは何一つ行動することもできません。

とすれば、私たちの「本性」のもっとも深いところに、「信じる」という心の働きが組み込まれていることになります。「信じる」とは「信頼」であり、また「信仰」でもあります。そして、この「信じる」力は、それを私たちに賦与してくれた「存在」によって保証されているとしたら、「信じる」という行為は、究

極的にはその「存在」へと向かうものでなければならないでしょう。

信仰と理性

神を感じるのは心情であって理性ではない。信仰とはそのようなものである。（B二七八、L四二四）

パスカルが言うように、信仰には理性を超えたところがあります。古典的な三段論法を使えば、次のようになるでしょう。もしも神がすべての存在に先立つ「存在」であり、われわれがその中に生きている自然も神の創造によるものだとすれば、まさしく神は自然を無限に超えていると言うべきである。ところで信仰とは、その神を信じることである。とすれば、信仰とはまさに超自然的行為に他ならない…

自然のものごとにさえ理性を超えたものが無数にあります。超自然的なことについては言うまでもないでしょう。

しかし、それは理性の役割を否定することでは決してありません。最初から理性を無視するようなら、それは信仰とはいえません。迷信とか盲信と呼ぶべきです。

パスカルはこうも言っています。

理性の最後の歩みは、理性を超えるものが無限にあるということを認めることにある。それを知るところまで行かなければ、理性は弱いものでしかない。自然的な事物が理性を超えているならば、超自然的な事物については、なんと言ったらいいのだろう。（B二六七、L一八八）

ただし、気をつけましょう。これは理性を徹底的に使い、理性によってとらえられる限界までものごとを追求することを前提として述べられているのです。その上で、理性は自らの限界を認め、限界を超える領域については、心情の働きにゆだねるのです。――これこそ、すぐれて理性的行為と言うべきでしょう。警戒すべきはむしろ「理性を排除すること」と「理性しか認めないこと」という「二つの行き過ぎ」（B二五三、L一八三）です。

信仰と理性は両立できないというのは、だから、間違った先入観であると、はっきり言う必要があります。だれも自分が知らないことについては確信がもてないように、信仰も、学び知る努力を伴わなければ、神を信じることもその教えを受け入れることもできないのです。より良く知ることによって理性が納得し、心が同意したとき、はじめてそれは深い信仰となることができます。パスカルにならって言えば、「理性の服従と行使、そこに真のキリスト教がある」（B二六九、L一六七）と申せましょう。

とはいえ、理性が納得し、心（心情）が同意するためには長い時間がかかり

ます。本当にそうなのか、それでよいのか、あれこれと調べ、検討し、吟味し、考えなければなりません。しかし、人間には限界がありますから、自分の考えだけで事足たれりとするのはあまりに危険です。聖書を読み、カトリック要理のような入門書からアウグスティヌスのような神学の古典を読むことも必要です。それだけではなく、問題が信仰である以上、神を信じている人々、キリストの教えを信じて生きている人々との出会いと導きが不可欠です。実際に、信仰は人から人へと直接に伝えられ教えられるものであって、導き手のないまま人は信じることはできません。

私がようやく賭に踏み切ったのはパスカルとの出会いから二〇年後のことでした。

それまで、私がどんな人々に出会ったか、お話ししましょう。

第三部　人との出会い

岩瀬孝教授

私が最初に出会ったカトリック信者は、前にも述べたように、卒業論文の指導教授になっていただいた岩瀬孝教授です。大学三年のときでした。ゼミの学生はお宅にもよく呼ばれたので、ご家族とも知り合い、それ以来、先生にも奥様にもずいぶんお世話になりました。岩瀬先生を通じて、東京のカトリックの家庭の雰囲気を知ることができたと思います。

岩瀬先生には大学から大学院にかけて、ラシーヌやフランス演劇のことだけでなく、カトリックのこともいろいろと教えていただきました。これこれの場

合にはカトリックではこうするのだ、こういうときはカトリックではこんなふうに考えるのだ、などという話を何度もうかがいました。自由闊達で陽気な人柄で、先生と接していると、カトリックの世界はパスカルやラシーヌの悲観的で暗い色調の世界では必ずしもないし、カトリック信者はジャンセニストたちのような峻厳な雰囲気の人ばかりではないことが、体験的によくわかりました。

ただ、当時の私の関心は、もっぱら知識としてのキリスト教・カトリックに限定され、信仰のことにはそれほど興味を示しませんでしたから、二〇年後に私が洗礼を受けるようになるとは、先生も奥様も予想していなかったでしょう。私自身も思ってもいなかったことです。私が受洗したことをお知らせしたときは、ご夫婦とも大いに驚かれ、心から喜んでくださいました。

山田さん夫妻

一九七二年四月、私は長崎に赴任しました。私が勤めることになった長崎外国語短期大学というのは、プロテスタント系のキリスト教主義学校でした。ただし、宣教団体が創設したミッションスクールではなく、ある特定の会派だけでかたまっているわけでもありませんでした。当時、フランス語専攻の教師の一人はカナダ人のカトリック司祭でしたし、その後もカトリック信者の教員が仲間に加わっていますから、反カトリックという雰囲気はありませんでした。

長崎での私の最初の住まいは、浦上教会（浦上天主堂）のすぐ近くでした。学校が見つけてくれた下宿でしたが、それは山田さんというカトリック信者の家でした。玄関を入ると、すぐ正面に聖母の絵が額に入れてかけられていたので、すぐにこの家はカトリックだとわかりました。挨拶と同時に「こちらはカトリックなのですね」と山田さんのおばさんに言ったところ、おばさんはびっ

くりして、「なんでわかるのですか?」と問い返してきました。「聖母の絵がありますから」と答えると、ますますびっくりした様子です。まさか、関東から来た新米の教師がそんなことを知っているとは想像できなかったのでしょう。

山田さんはおじさんとおばさんの二人暮しでした。親切で、信心深いご夫婦でした。信仰が生活にしみこんでいる生き方とはどういうものかを、山田夫妻は私に身をもって教えてくれました。

たとえば、こういうことがありました。山田さんのところには、結婚するまでのあいだ、二年と数ヵ月しかいませんでしたが、その後もつきあいは続きました。あるときたずねると（家内と二人だったか私一人だったか、正確に覚えていませんが）、おばさんだけが出てきました。おじさんは病気で入院中とのことです。おばさんが言いました。「急に具合が悪くなって、そのときは、お医者様を呼んだものか、神父様を呼んだものか、迷いました」と。「病者の塗油」は知識としては知っていましたが、なるほどそういうものなのだということが、

このとき初めてわかりました。

こんなことも思い出します。七五三の時期でした。諏訪神社に子供をつれてお参りする姿がテレビニュースで映し出されているのを見ながら、山田さんのおばさんに、「お宅ではどうでしたか」と尋ねました。するとおばさんは答えました。「あいにくうちは、七五三のことは、よく知らないのですよ」。

そう言われて、はっと気がつきました。たしかにカトリック信者が神社にお参りに行くことはないでしょうから、よく知らなくても当然です。ただ、七五三といえば日本人なら誰でも知っているはずと思いこんでいた私にとっては、驚きであると同時に、信仰のあり方について認識を深めることができた経験でした。念のために付け加えれば、山田さんには他宗教をかたくなに拒否するような偏狭さはまったくありませんでした。ただ、子ども時代、七五三に限らず、初詣など普通の日本人が神社に行くようなときでも、親から連れて行ってもらった経験はまったくなかったので、「よく知りません」と事実をそのまま答えた

のでした。

信仰がごく自然に生活に根付いている姿を、山田さんご夫妻からは、このほかにも何度となく見せてもらいました。クリスマスを祝った一週間後にはお寺に行って除夜の鐘を聞き、その足で神社に初詣というような、ごく普通の日本人とはまったく違った宗教感覚をもつ人が、ここ長崎にはいるのだということを実感したのも、この山田さんのおかげでした。

結婚

一九七四年に私は結婚します。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」（マタイ一九・五、マルコ一〇・七―八。創世記二・二四参照）という聖書の言葉の意味を考えれば、人との出会いのうち、私の人生でもっとも重要なのは家内との出会いでしょう。実際に、洗礼を受けるときも二人でずいぶん話し合い、考えもすっかり一致したうえで、二人して決心することができました。子ども三人――あとで二人増えて五人になりますが、そのときは三人だけでした――にも話をし、家族一緒に洗礼を受けることになったのです。家内と一致していなければ、これは実現できなかったことでした。

結婚したとき、家内も信仰をもっていませんでした。家内の両親は（私の両親と同様に）信仰とは無縁です。ただし、家内の母方の祖母は毎日お経をあげ、先祖の供養も欠かさない人でした。そうした信心深さは、家内の叔父とその家族が受け継いでいます。

家内は山田さん夫妻とも知り合いましたが、私ほどは親しく接する機会を持ったわけではありません。家内がカトリックの環境にふれるのは、むしろその後、ある女子修道会が経営する浦上の養護施設で働くようになってからです。そこで働いたのは、長男の出産までのごく短い間、一年足らずのことでしたが、カトリック的な雰囲気や生活のリズム、ものの見方や行動の仕方などを知るよ

うになりました。そのときはまだ、家内も私も洗礼を受けることなど考えてもいませんでしたが、あとで振り返ってみると、こうした経験も私たちを信仰に導くための要因のひとつだったのでしょう。

マリアテレサ・バルデス先生

職場で親しく接してきた同僚の中には、プロテスタントの信者もカトリックの信者もいますが、今振り返ってみると、私と私の家族の人生に大きな影響を及ぼしたのは、スペイン人のマリアテレサ・バルデス先生でした。バルデス先生がスペイン語の教員として長崎外国語短期大学に着任されたのは、私が結婚して間もない頃で、私も家内もすぐに先生とは親しくなりました。バルデス先生は親切でやさしい人柄で、いつも笑顔をうかべている人でした。地味で控えめなのですが、ヨーロッパ流の洗練が身に付いた姿がとても印象的でした。そ

して最初の頃はわからなかったのですが、カトリックの信仰を百パーセント生きようとする生活を送っている人でした。

洗礼を受けた後、はじめてよくわかるようになったことですが、バルデス先生は私たち家族のために祈り続けてくれていました。それが大きな力となったと私も家内も思っています。先生は紀元二〇〇〇年を迎える直前に亡くなりましたが、いまでは天国で私たちのために祈り続けてくれているに違いありません。「聖徒の交わり」というカトリックの教えは、私たちを支え、はげますものだということを、こんなときに実感します。

カトリックへの親近感

いつの頃からかよく覚えてはいませんが、カトリックへの親近感がずっとありました。ひとつには、私の仕事や専門分野によるのでしょう。フランス語、

フランス文学を学び、フランス語教師として働き、ラシーヌを研究し、パスカルに親しむ…人とのつきあいと同じく、研究や仕事の対象も、長く深くつきあっていると、受ける影響もそれだけ大きくなります。またそのくらいでないと、本当に研究をした、仕事をしたとは言えません。

しかし、人との出会いやつきあいもまた重要な要素です。大学時代の恩師に感じていた親しみは、知らず知らずのうちに大きな影響を与えていたに違いありません。長崎に来てからは、山田さん夫妻や浦上の養護施設のシスターたちを通じて知った、親から子へと伝えられる素朴な信仰への共感もありました。

もしも信じるなら、それはカトリックの教えに違いないだろう――そう私は感じるようになっていました。私も家内も、信念も理想もないまま生活している大多数の日本人の生き方を良しとすることはできませんでした。信念や理想と言いましたが、むしろ信仰と言ったほうが良かったでしょう。しかし、まだ賭に踏み切ることはできませんでした。もうひとつ、私と家内を前に押し出す

何かが必要でした。

精道学園

その何かとは、精道（せいどう）学園でした。精道学園は小・中一貫教育を行っている学校で、その精神面の指導はカトリックの属人区オプス・デイが担当しています。

長男が小学校に上がるとき、私は精道学園に行かせたいと思いました。その少し前に、私の学校に講師として精道の神父様に来ていただいたことがあったのですが、神父様と話をするうちに、私はその人柄や考え方に共鳴し、ぜひ子どもをこの神父様のいる学校にやりたいと思うようになりました。

家内も、私の同僚の先生から、精道はとても良い学校だからぜひお子さんをやったらよいと熱心に勧められていました。その先生は子どもさんをすでに精道に通わせており、私や家内に精道学園のことをよく話してくれたのです。

しかし、長男は友達と離れたくないから、地域の学校に行きたいと言い張りました。私のフランス留学などの事情から、長男が生まれてから六年の間に、私たちは五回も引越しをしていました。近所や幼稚園でできた友達と別れて今の家に引越してきてからまだやっと半年あまり、新しい友達もようやくできたところだったのです。説得は成功せず、しかたなく私は長男を地域の学校にやることにしました。

次の年、今度は娘が小学校にあがる番になりましたが、娘は何のためらいもなく精道に行くと言いました。そこで、子どもたちを連れて学校を見学に行ったところ、長男も「おれも精道に行きたい」と言いだしました。

こうして、精道学園との長いつきあいが始まりました。長男は現在二五歳ですが、一番下の息子（四男）は中学一年生なので、この子が中学を卒業するときまで通算すると、精道での保護者生活は二〇年に及ぶことになります。これはちょっとした記録ですが、最長不倒記録ではなさそうです。世のなか、上には上があるものです。

ところが、精道への転校が決まって安心していた矢先、長男が病気になりました。若年型（インスリン依存型）糖尿病でした。家内も私もショックでした。息子は今でも毎日何回もインスリン注射をしています。インスリン注射と食生活のコントロールで血糖値を安定させておきさえすれば、社会生活にはなんら問題ありません。ですから、息子は見たところ普通の健常者となんら変わりませんし、実際に健康なのです。

ただ、最初のころは深刻でした。インスリン注射の訓練や、血糖値の測定とインスリン投与量の変更のために毎年繰り返される長期入院のため、親子とも大変な時期が続きました。

息子の病気は、洗礼のきっかけの一つになったと思います。困難に直面したとき、人は精神的にも変わるものです。

ただ、もう一つ大きな理由は、精道学園の先生たちと出会ったことです。

この人たちと親しく接するようになって最初に感じたことは、皆がいつもにこやかで自由なこと、すべてに積極的、肯定的であるということです。仕事は人一倍熱心にするが、仕事しか知らないワーカホリックではなく、友人とのつきあいや家族と過ごす時間を大切にし、また信仰を大切にしていました。この人たちとのつきあいを通じて教えられたのですが、信仰を大切にするというのは、ただ信者であるというだけではなく、日曜ごとに――できれば毎日でも――教会に行き、ミサにあずかり、しばしばゆるしの秘跡にあずかり、日々の祈りを欠かさないというように、信仰を日常生活の中で具体的に実践することによって、その大切さを表現するということでした。

それまでに出会った信者たちがそうでなかったと言うのでは決してありません。ただ、そのことの意味をはっきりと、決定的ともいえるような形で私たちに気づかせてくれた――とむしろ言うべきでしょう。

信仰と生活の一致、信仰と仕事の一致を、まさに自分の人生で実践している

人たちがここにいる――そう私も家内も感じました。実はバルデス先生もそういう生活を送っていたのですが、私たちは長い間そこまで気づかなかったのです。しかし、精道学園で多くの人々と知り合って、ようやくそれがわかりました。迂闊といえば迂闊ですが、「見えない」というのはまさにそういうことなのでしょう。

聖ホセマリア・エスクリバーの教え

精道学園のメンバーたちを通じて知ったもう一つの大切なことは、オプス・デイ創立者ホセマリア・エスクリバー神父（一九〇二―一九七五、一九九二年列福。二〇〇二年一〇月に列聖）の教えです。それは、すべての人が聖人になるよう招かれているというものです。すべての人が、各々が置かれた場所・社会的な身分に応じて、自分の仕事を聖化することによって、自分自身を聖化し、また自

ホセマリア・エスクリバー
（1902〜1975）

分の周囲にいる人々をも聖化する――それこそが全てのキリスト信者に求められていることだ、というのです。

神がつくられたこの世界を愛し、頭は天に向けながら、大地を両足でしっかりと踏みしめて人生という旅を歩んで行く。そして日々の仕事を神から与えられた任務として、ていねいに完全にやりとげる努力を積み重ねる。そうすれば、仕事は私たちを聖化するための手段となる――それが、聖ホセマリアが繰り返し説いた教えでした。

聖ホセマリア・エスクリバーは「愛すべき天地」という説教（一九六七年一〇月八日）の中で、こう語っています。

日常の生活こそキリスト信者の本当の生活の場（であり……）、「兄弟である人々のいるところ、希望の実現をめざし、仕事に従事し、愛情を捧げるところ――これこそ皆さんが日々キリストと出会う場です。この世の最も物質的なものの真っ只中こそ、神と人々に仕えつつ自らを聖化すべきところです。

長い間、西欧キリスト教世界では、人間の弱さや罪を強調し、現世を悲観的、否定的にとらえる傾向が強くありました。また、労働は人間に与えられた苦役・罰であるという誤解も一般に広まっていました。司祭や修道者にならなければ、あるいは世を捨てて隠れた生活に入らなければ、聖性への道を歩むことはできないという固定観念のようなものがありました。パスカルやラシーヌの研究を通じて、私もそうした考え方がヨーロッパの伝統にあることを知っていましたから、エスクリバー神父の教えは大きな驚きでした。従来の西欧的「常識」とは正反対のことを言っているからです。

聖エスクリバーは「世界は良きもの」「神の御手から出たもの」と教えます。

旧約聖書冒頭の創世記に「神はそれを良しと思われた」と何度も記されている通り、神は世界を「良い」ものとしてつくられた。また「神はご自分にかたどって、人間をつくりだされた」とあるように、人間は神に似たものとしてつくられ、人祖が最初の罪を犯す前は恩寵（神の恵み）に満たされた状態にあった。「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」（創世記、二・一五）。つまり労働は、原罪の前から本来人間がなすべきこととして神からゆだねられたものだったのです。

この世界が調和を失い、人間が生きるために労苦し額に汗して糧を得なければならなくなったのは、原罪の結果、人間が恩寵を失ったためである。そして、人間の罪をあがない、失われた恩寵を取り戻すために、キリストは人間としてこの世に生まれた。キリストによって人間は神の子として、再び神と一致する道がひらかれた――と聖書は教えています。

では、どうすれば神の子にふさわしい生き方ができるのか？　キリストに倣うことだ。キリストは、宣教生活に入るまでは、パレスチナの片田舎でごく普通の人間として、労働によって日々の生活を支えながら過ごされた。日常生活と労働の価値を、キリスト自身がその模範によって示している。だから、私たちもそれに倣えばよい……

エスクリバー神父のこうした教えは、やがて第二バチカン公会議で「教会の教え」として正式に認められることになりますが、私にとっても間違った「常識」から解放してくれる力となりました。悲観的なものの見方・考え方から私を解放してくれたと思っています。というのも、エスクリバー神父の教えの特徴は「喜び」にあるからです。

肯定的に考える

実際、精道学園の神父様や先生・職員の方たちをみると、喜びと平和のうち

に働き生きるとはどういうことか、よくわかるような気がします。もちろん日々の苦労や困難がないはずはないのでしょうが、いつもにこやかにしています。それに、親しくつきあうようになってわかったことは、この人たちは本当に肯定的に物事を考え、見ているということです。

例えば、こんなことを思い出します。うちの長男が糖尿病とわかって入院しなければならなくなったとき、当時の加納校長先生に相談に行きました。編入が決まったすぐあと、三学期の途中でした。入院はかなり長引きそうで、このままだと始業式には出られそうにありません。それに退院後も、血糖値のコントロールのための検査やインスリン注射など、毎日が闘病生活になること、毎年複数回、検査とコントロールのために、定期的にそれも長期間入院を余儀なくされること、学校生活にもいろいろと支障をきたすに違いないことなどをお話しました。

家内も私も不安がいっぱいだったのですが、加納先生はまず最初に「どうか

ご心配なく、私たちみなで息子さんをサポートしますから、学校のことは安心してください」と言って私たちをはげましてから、今後具体的にどうしていったらよいか、相談にのってくれました。息子の病気の状況や親の希望を確かめながら、実に親身に応対してくれたと思います。

加納先生の応対でとくに気がついたことは、問題を前にしたとき、たじろがないということでした。そんなとき、多くの人の反応は「それは難しい問題です。大変ですね、どうしたものでしょう。ああなるとまずいし、こうなってもいけない、困りましたね…」となってしまいそうなのですが、加納先生は違いました。「それは確かに大変でしょうが、何ができるかをまず考えましょう。これこれのことは、こうするとよいでしょう。その問題には、こうやって取り組んだらどうでしょう。このことについては、こうすることができますから、ご安心ください…」と、そんな調子でした。このような肯定的な態度に接すると、私たちは心強く感じ、信頼も生まれるものです。

喜びと平和

聖ホセマリア・エスクリバーは、平和の結果である喜びを得るためには戦いが必要だと言っています。

喜びはキリスト教の善であり、戦えば手に入る。喜びは平和の結果であるからだ。平和とは、戦いで勝利を得た結果であり、地上における人間の一生は、聖書によると、戦いである。

——ホセマリア・エスクリバー『鍛』一〇五

たしかに、喜びと平和を保ち続けるためには、努力も戦いも必要でしょう。困難に出会ったり、思い通りにことが運ばないときなど、私たちは憂鬱になったり不機嫌になったりしやすいです。問題を解決する努力だけでなく、憂鬱や不機嫌とも戦わないと、喜びも平和も保てません。自分を常にコントロールしようという強い意志が必要でしょう。そういうことがわかってきたとき、いつもにこやかにしている人を見ると、その人が実は外からは見えないところでいつも自分と戦っているのだ、ということもわかるようになります。

喜びと平和の心で、神の現存を保ちつつ、働きなさい。
こうすれば良識にそった働き方もできるだろう。疲れて倒れそうになっても最後まで完全にやりとげ、神に喜ばれる仕事をすることになるのである。

——ホセマリア・エスクリバー『鍛』七四四

良い仕事をし、それを最後まで成しとげるためには、喜びを持って仕事に取り組まなければならないでしょう。なぜなら、不承不承するときには、良い仕

事はできませんし、そんな仕事を神に捧げることもできないでしょう。喜びと平和を保つ心にこそ神は現存するという教えも、そう考えれば納得が行くものです。

個人的経験ですが、私が知り合ったカトリック信者――信仰が生活と結びついていると感じた信者――は、だれもが喜びと平和を感じさせる人たちでした。活気に満ちた人もいれば物静かな人もいますが、共通していることはどんなときでも肯定的にものを見、考え、行動するということです。そして、そういう人たちが心に保っている喜びと平和は、必ず相手にも伝わるものだということも、今振り返ってみると、本当によく実感できるのです。

それとは反対に、陰気な人、消極的な人、ものごとをいつも悲観的に見る人、失敗することばかり気にする人――そういう人にも出会ったことがあります。そんな人は、周囲に喜ばれるようなことも、人を助けるようなことも――心の中ではそうしたいと思ってはいるのでしょうが――できません。自分から進んで仕事を引き受けることもありませんし、ましてや重要で困難な仕事となると、怖気づいてしまい、何かと文句をつけては反対するのです。せいぜい、他人の後を不承不承ついて行くぐらいでした。そういう人を見るのは、とても悲しいことです。

人を不愉快にするという意味では、不機嫌や憂鬱は愛徳に反することです。信仰を持つと言いながら、いつも不平や不満ばかり口にするような人がもしもいたとしたら、その人の信仰とは一体何なのでしょうか？　喜びも平和ももたらさない信仰とは、何と奇妙な信仰でしょう…

第四部　賭に踏み切る

カトリックの教えを学ぶ

精道の先生たちと親しくなるにつれて、大人になってから洗礼を受けた人がかなりいることを知りました。浦上の山田さん夫妻のような、親から子へと受け継がれる素朴な信仰もたしかに素晴らしいものですが、それは私や家内には得られなかったものです。しかし、この先生たちのように、大人になって洗礼を受け、信仰と生活を一致させている人たちもある。この人たちの信仰のあり方こそ、私たちが学ぶべきものではないか――そんなことを思うようになりました。

子供が精道学園に通うようになって二年目だったと思います。家内も私も、精道のフェルナンド・アカソ神父様について、カトリック要理の勉強を始めました。精道の基礎神学講座や聖書の勉強会などにも、定期的に通うようになりました。なぜその気になったかというと、神父様や先生たちの熱心な働きかけがあったからです。自分が信じていることを是非伝えたいという熱意に動かされたのです。この人たちがこれほど真剣になって伝えようとしていることを、私たちも本気になって聴いてみようという気になりました。

要理を学んで感じたのは、カトリックの教えは非常に具体的でしかもいちいち納得できるということです。理性が認め、心が同意するとはこういうことかと思いました。それまで私が知識として知っていたことも無駄にはなりませんでしたが、神学は信仰の光に照らされてはじめて可能となるということも実感しました。

とはいっても、頭では受け入れることができても、心がなかなか受け入れな

いこともありました。とくに罪の告白（ゆるしの秘跡）にはだいぶ抵抗を感じました。自分の犯した罪の一つひとつを告白する、つまり人間的に見れば――もしも人間的にしか見なければ――これはまさに自分の恥をさらす行為ですから、それをあえて実行するのは容易ではありません。自尊心が邪魔をするのです。

そういう抵抗こそ、実は人間の弱さからくるものに他なりません。自尊心というよりは高慢のなせる業であるということは、そのときも頭ではわかったつもりですが、これにはだいぶ悩まされました。自分の弱さと罪を謙遜に認めること、司祭に告白するのではなく、司祭を通じて神に告白していることを信じるとき、はじめて、司祭の与える罪の赦しは神からの赦しとなるのです。信仰がなければ、告解（罪の告白）はできませんし、また意味もありません。これを謙遜に受け入れられるか否かが、賭に踏み切れるかどうかの分かれ目となるだろうと思いました。

聖体の秘跡も、三位一体の神秘もそうですが、「ゆるしの秘跡」にも、神の知恵と助けとが働いているとしか言いようがありません。人間の知恵だけで考えつくものでは到底ないからです。キリストを信じない人には、ばかばかしすぎて信じられないことだからです。キリストを信じるか否かが、まさにそこで問われているのだということを、改めて思い知らされました。しかし、それと同時に、カトリック教会は人間のことを徹底的に知っていると、家内と二人で感嘆しました。人間の弱さをよく知るがゆえに、どうしたら人間は救われるかということもよく知っているのです。

告解のことに話をもどしますが、洗礼を受け、実際に「ゆるしの秘跡」に何度もあずかることを通じて、これこそが神の恵みであると体験的に知ることができるようになりました。赦されるということを、人間が実感をもって受けとめられるように、神はキリストを通じてこの秘跡を制定されたのです。家内も私も、今でもずっと「ゆるしの秘跡」には定期的にあずかるようにしていま

す。

繰り返しになりますが、これは人間の知恵ではなく、神の知恵が働いていることの証拠であると、私たちには思えました。カトリックの神学は聖書と共に聖伝（使徒たちから今日まで教会を通じて伝えられたキリストの教え）に深く根ざしています。そこには、個人の才能や人間的な霊感をはるかに超えた、神の啓示が浸透していますが、それは人間の理性を拒むものでは決してありません。むしろ、人間が少しでも理解できるように、神の知恵が人間の知恵に働きかけている、そして人間もそれに力の限り応えようとする…

人間の理性ではどうしてもとらえることができない神秘（mysterium＝秘義）を、人間の理性（これも神の恵みにほかなりません）によって可能な限り追究しているのがカトリックの神学です。私のように、頭で理解しながら進もうとする人間には、これは実に刺激的なことでした。

たとえば、神の存在を理性でどうとらえたらよいか…

自然そのものが、その整然とした秩序と見事なシステムによって、あるいはその美しさによって、それが単なる偶然の産物ではないことを物語り、創造の業と創造主の存在を証言している、と言うことは可能でしょう。そして、この宇宙が、パスカルの「二つの無限」にもあるように、マクロの世界においてもミクロの世界においても無限であるかのように見えるとしたら、その宇宙を創造した「存在」は、まさに無限の存在でなければならないと。

さらに、創造主は空間だけでなく時間をも支配する「存在」でなければならない。とすれば、それは永遠よりも先に存在し、また永遠の後にもなお存在し続けるはずである。つまりそれは、時間・空間・物質・生命といったあらゆる存在に先立ち、それらすべての存在を存在せしめている「存在」でなければならない。聖書が神について「私は〈在るもの〉である」（旧約聖書、出エジプト記三・一四）と記しているのは、まさにその通りだからである……

長与教会と岩永四郎神父

家内と私がカトリック要理の勉強を始めたちょうどその頃、私たちが住んでいる町に教会ができました。カトリック長与教会です。洗礼のことを考え始めたら、手回し良く教会まで近くに建ってしまいました。あまりにもできすぎた話です。「ここまで用意されてしまっては、あとはもう洗礼を受けるしかないね」と、家内と二人で妙に納得したものです。パスカルの「賭」に応じる準備が、こうしてできたのでした。

できすぎた話をもうひとつ。長与教会での最初の受洗者は、私たちの家族でした。

長与教会ができてまもなく、私たちはアカソ神父様から長与教会の岩永四郎神父様（一九一一―一九九七）に紹介してもらい、日曜日のミサにも出るようになりました。プロテスタントの礼拝は勤務先の学校の式典で知っていましたが、カトリックのミサに出るのはこれが初めてです。司祭と会衆の「主は皆さんと共に」「また司祭と共に」というやりとりには、とても親しみを感じました。教会が共同体であること、そしてキリストの神秘体でもあることを、そんなところに妙に実感したことを覚えています。

岩永神父様は若いころフランスで五年間神学を勉強された方で、フランスを第二の故郷のように愛していました。私と家族は、この岩永神父様から洗礼を授かるのですが、私たちが長与教会の受洗者第一号だったこと、しかも家族そろっての受洗ということで、岩永神父様はとても喜んでくださいました。それに加えて、私がフランス語教師ということもあって、ずいぶん親しくさせていただきましたし、お世話にもなりました。

岩永神父様はいつも熱心に祈り、ミサを大切にしていました。何かの用事で教会に行き御聖堂に入ると、岩永神父様がそこでロザリオや聖務日祷（教会の祈り）を唱えているのを何度も目にしました。

もちろん、経験を積んだカトリック信者なら、司祭がそういう日常生活を送っていることは知っているはずです。しかし、それは人に宣伝するようなことではまったくありませんから、私のように大人になってから洗礼を受けた者には、頭ではそれが当然のこととわかっていても、実際に岩永神父様のそうした姿に接したとき、新鮮な驚きと感動を覚えました。キリストは、自分の群れを牧する牧者を任命するよう定められたわけですが、岩永神父様のような司祭に出会ったとき、はじめてその意味が理解できたように思います。

岩永神父様は当時すでに七五歳になっていましたが、元気一杯で、いつも司牧の仕事に励んでおられました。病人にご聖体をさずけるため、よく車で出かけられていたのを、今でも思い出します。家内も私も神父様は百歳まで生きるだろうと思っていましたから、八六歳でなくなられたときはずいぶん早死にされたような気がして、残念でなりませんでした。

受洗

精道の神父様や先生方と出会い、また長与教会で岩永神父様と出会い、精道と長与に私たち家族の居場所ができたとき、「賭」の条件が整ったのです。あとは「賭」に踏み切るだけでした。

一九八六年一二月二一日、私たち家族五人は、岩永神父様と精道のアカソ神父様の共同司式によるミサの中で、洗礼の恵みを授かったのでした。家内・長男・長女・次男・私の五人です。

洗礼式のミサには、精道の先生たちが大勢来てくれました。私の学校の山本学長も式に出席し、わたしたち家族の受洗を祝ってくれました。「悔い改める一人の罪びとについては、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」（ルカ一五・七）と福音書にありますが、私たち家族の洗礼にもこれと同じ喜びがあったのでしょう。

いのちは神の恵み

洗礼を受けてまもなく、男の子が二人生まれ（この子たちは幼児洗礼です）、わが家は七人家族となります。

子どもが五人というと、たいていの人がびっくりします。いのちが神の恵みであることを知れば、「子どもに恵まれる」という表現は文字通りの意味で受け取ってよいことがわかるはずなのですが。日本にも昔は「子宝に恵まれる」という言い方がありました。子どもに恵まれたとき、はじめて人は親となることができます。それがどれほど意味のあることか、人間を、夫婦を成長させてくれることか――五人の子どもをもつようになって、ようやくそれが実感できたと思います。もっとたくさん子どもがいる人たちから見れば、五人はまだ少ないのかもしれませんが…

子どもが生まれることを経済的な観点からしか見ることができないとしたら、実に貧しく悲しいことだと思わずにいられません。「子どもはスプーンをもって生まれてくる」（子どもが生まれるときには、経済的に困難に思えても、神様がその子のためにちゃんと計らってくださる）というスペインのことわざがあるそうです。そのとおりだということを、その後の生活を通じて私たちは実感しました。

もっとも、今は長男と次男が仕事や学業で家を離れていますから、現時点では五人家族です。長女は大学を出てから一時家に戻っていますが、まもなく留学する予定です。こうしていつかは、子どもたちはみな成長して家を離れ、やがて家内と私の二人にもどるのでしょう。

「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である」（マルコ一〇・六―九）という聖書の言葉が、いま改めて心に響

いてきます。人間のことは、夫婦が最初の単位となり、最終の単位ともなる…神様から恵まれた宝を、時がくれば神様に返すことを、私たちは知るべきでしょう。

召し出しと回心

洗礼を受けて、家内と私が深く感じたのとちょうど同じことを、マルティーニ枢機卿が見事に説明してくれていますので、紹介したいと思います。枢機卿は、ひとりのジャーナリストからの問いに答えて「回心」について語っていますが、大人になって洗礼を受ける場合も、まったく同じように言うことができるでしょう。

アライン・エルカン（ジャーナリスト）

ひとりのおとなとして神へと回心する場合には、何をすればよいのですか。生き方や自分の家族との関係、あるいは仕事の仕方、愛を注ぐべきものなどを変える必要があるのですか。

マルティーニ枢機卿

神へと回心するときには、かならず大きな喜びがあります。

生活を破壊するような病的決断とは違います。それどころか回心を経て人は、現実を新しい仕方で見なおし、透き通る落ち着いた目ですべてを考えなおすことができるようになるのです。

神へと回心する人は、喜びと平和のうちに物事を理解する恵みを受けるでしょう。人が考え方や話し方、行動の仕方、メンタリティー、毎日の過ごし方を変えるのにふさわしい条件は、喜びと平和です。そしてこれは、困難に見えることでさえも、易しいとわからせる内心の確信と力を与えてくれます。

いいかえますと、変えなければならないのは、心です。

——カルロ・マリア・マルティーニ『私はどのように神を見いだしたか』

（女子パウロ会、一九九八年）

蛇足になりますが、マルティーニ枢機卿のこの本（対話と言ったほうがよいですが）の原題は、*Cambiare il cuore* つまり「心を変える」です。心を変える、心を神のほうに向ける、それがまさに「回心」ということですが、実際に心の向きが変わると、生活も変わります。ただし、表面的には何も変わっていないように見えます。というのも、枢機卿が言われるように、生活が破壊されるわけではまったくないからです。ではどうなるかというと、深くなるのです。平和と喜び、それも受動的で感覚的な喜びではなく、もっと落ち着いた、感情や感覚とは別の次元の、落ち着きと安らぎに支えられた喜びを感じるようになるのです。

それまでの私はただ仕事をしていただけでした。しかし、洗礼を受けてから、その仕事は「召し出し」に変わりました。していることは以前とまったく変わらないように見えても、この仕事が私の「召し出し」であると理解した瞬間に、それは大きな意味をもつものになったのです。仕事だけでなく、仕事を通じて私の人生そのものが意味をもつものに変えられたのでした。これが私にとって、そして家内にとっても、信仰の恵みとして与えられた確信です。

あなたは光と色彩にみちた心で大喜びの日々を送っている。しかも奇妙なことに、以前なら落胆の動機となっていたことが、今度は喜びの動機となっている。

それが普通なのだ。全てあなたの見方次第である。「神を求める者の心は喜ぶ！」神を求めるなら、心はいつも喜びに満たされるのである。

——ホセマリア・エスクリバー『拓（ひらく）』七二

ポルティーリョ司教のすすめ

ただ、この確信をそのとき限りのものにしてはいけません。洗礼を受けたからといって、そのあと何もしなければ、信仰は弱まり、薄れてしまいます。

心を変えるのは一度限りではありません。信仰の恵みをいただいていても、私たちが弱い、欠点だらけの惨めな存在であることは変わりません。ミサの初めにはいつも罪の赦しを願うように、私たちはいつも心を神に向けなおす必要があります。日々の「回心」を心がけながら、信仰を育てる必要があります。

洗礼を受けてまだ間もないとき、思いがけない出会いがありました。エスクリバー神父の後継者で、オプス・デイ属人区長のアルバロ・デル・ポルティーリョ司教様（一九一四―一九九四）が長崎を訪れたのです。

一九八七年二月に、長崎精道小・中学校で、オプス・デイのメンバーや精道の教職員、父兄、一般の希望者を対象に、司教様との団欒（だんらん）の時間がもうけられました。私たちは家族でその団欒に参加しました。三人の子どもたち（小学生二人と幼稚園児）と家内と私の五人です。上の子ども二人が精道小学校の二年生と一年生でしたので、精道学園の父兄・児童という資格でしたが、それ以上の関心を持ってこの機会にのぞみました。二ヵ月前に家族そろって洗礼を受けたばかりでしたし、しかも、子どもたちを精道学園に入学させたことがきっかけでオプス・デイと出会い、それが私たちを信仰に導いてくれたからです。だから、ポルティーリョ司教様にはぜひお会いしたかったし、できれば直接お話ししてみたかったのです。

エスクリバー師（左）と
ポルティーリョ師（右）、1974年

司教様に聞いてみたいことがありました。あいにくその団欒のときには質問を

する間がありませんでしたが、あとで特別に司教様と会う機会が得られました。

ポルティーリョ司教様はにこやかに私たち家族を迎えてくださいました。通訳はいましたが、私は直接司教様に聞いてみたかったので、用意していた質問をフランス語でたずねました。

「わたしたちは二ヵ月前に洗礼を受けたばかりです。今は洗礼の恵みで、心は燃えています。しかし、時間がたって、その熱が冷めたりしたら、どうしたらよいでしょう。どうすれば信仰を守ることができるでしょう。」

司教様の答えはこうでした。

「イエス様と親しくつきあうことです。いつも、コンスタントに、イエス・キリストとの親しい交わりを保つよう、こころがけてください。イエス様から離れない限り、信仰を失うこともありません。逆に、イエス様とのつきあいが深くなればなるほど、あなたたちの信仰も深まります。だから、イエス様と親しくつきあいなさい！」

司教様は終始にこやかに、しかし熱をこめて語ってくれました。そして、私たち家族一同を祝福してくださいました。そのときの司教様の暖かいまなざしと力強い言葉は、今も鮮やかに覚えています。

おわりに

日常の振る舞いにおいても考えにおいても、生活と宗教を切り離してはならない。

——ホセマリア・エスクリバー『拓』三〇八

信仰と生活の一致はとても大切なことです。

日々の回心を心がけながら、召し出しを生きる——私の場合、それはフランス語教師として、神様から呼ばれたその場所、そのときの状態のままで、自分の仕事に最善を尽くすよう努力しながら、生活と信仰とを一致させてゆくことです。仕事の生活、家族、同僚、友人との生活も、すべて信者としての召し出しのうちに生きることです。

そのため必要な力は、ミサや祈り、ゆるしの秘跡や教理的な自己形成——つまりキリストにもっと近づくためのさまざまな手段の実践、キリストの教えをもっとよく知るための努力——を通じて得ることができます。逆に、そういう努力を怠ると、知らず知らずのうちに私たちは生ぬるくなり、結局はイエス・キリストから遠ざかってしまいます。私たちを導いてくれた人たちに倣いながら、私たちもそうした手段を通じて、キリストとの親しい交わりを保つよう心がけながら、毎日を生きるように努めています。

かつて私は恐れていました——死と共に、私という存在は、肉体だけでなく、精神も意識も、すべて消滅してしまうのではないかと。今ではもう恐れはありません。

「いのちは取り去られるのではなく、変えられるのである。」

これはジャン・ギトンが一九八九年に浦上教会（浦上天主堂）で行った講演

会で、自分の墓石に前もって刻ませている言葉として紹介したものです。死者のためのミサの叙唱からとった文句ですが、確かにその通りだと、今は心から思います。「信じる者にとって死は滅びではなく、新たないのちへの門であり、地上の生活を終わった後も、天に永遠のすみかが備えられて」（日本語の典礼文）いるのです。

パスカルという導き手を通じて、キリストに至る道が用意されていました。何人もの人たちとの出会いと親しい交わりを通じて、イエス・キリストは私を呼んでくださった。その呼びかけに応えることができたのを、私は心から喜んでいます。

二〇〇二年　秋

戸口民也

パスカルと『パンセ』について

ブレーズ・パスカル（Blaise Pascal　一六二三―一六六二）。フランスの思想家・科学者。科学者としては「パスカルの原理」「パスカルの定理」などで知られ、また気圧の単位「ヘクトパスカル」にも名をとどめています。思想家としては特に『パンセ』の著者として有名です。

『パンセ』は、そもそもキリスト教護教論――懐疑論者や無神論者に対してキリスト教の正しさを論証する書――として構想されたものですが、パスカルの死によって未完のまま終わりました。およそ一千篇におよぶ断章（準備ノート）からなる遺稿を、親族や友人たちが『死後、書類の中から見出された、宗教および他の若干の主題に関するパスカル氏の断想（パンセ）』と題して出版したのが世に知られるようになったはじまりで、今日一般に用いられている『パンセ』という

題名もそこからきたものです。

『パンセ』にはいくつもの版がありますが、特にブランシュヴィック版（テーマ別に分類された版）とラフュマ版（パスカルが残した原稿綴りの形をできるだけ忠実に再現しようとした版）の二つが有名です。巻頭に紹介した「考える葦」の断章の最後に（B三四七、L二〇〇）と付記してありますが、これは、ブランシュヴィック版（Bと略す）では番号三四七、ラフュマ版（Lと略す）では番号二〇〇に分類された断章という意味です。『パンセ』に直接あたりたい方は、この番号を参考にしてください。『パンセ』の翻訳としては、次の二つを推薦します。

・『パンセ』前田陽一・由木康訳、中央公論新社「中公バックス」（ブランシュヴィック版）

・『パスカル著作集』第6巻、第7巻、田辺保訳、教文館（ラフュマ版）

パスカルの伝記、『パンセ』についての参考文献

次の四冊を推薦します。

・前田陽一『パスカル「考える葦」の意味するもの』　中公新書

・J・メナール『パスカル』　みすず書房

・田辺保「パスカル伝」、『パスカル著作集　別巻2』　教文館

・塩川徹也『パスカル『パンセ』を読む』　岩波書店

ラシーヌの翻訳

次の本を推薦します。

・『フェードル・アンドロマック』　渡辺守章訳、岩波文庫

本文中の『拓』・『鍛』（ホセマリア・エスクリバー著）の言葉は、精道教育促進協会発行の、一九八九年版、一九九一年版からそれぞれ引用しました。

なおホセマリア・エスクリバー神父（一九〇二―一九七五）は、二〇〇二年十月六日、ローマで教皇ヨハネ・パウロ二世により列聖されました。列聖式のあとに出版される本書の記述では、著者の了解のもと「聖ホセマリア・エスクリバー」といたしました。

＊本書での聖書の引用は、日本聖書協会『聖書　新共同訳』によりました。

写真提供＝精道教育促進協会

本書は、二〇〇一年九月二日、大分カトリック会館（大分市）で開かれた戸口民也氏の講演「パスカルに導かれて」（カトリック心の講座）の原稿に、著者戸口氏が加筆し冊子用に編集したもので、二〇〇二年一〇月現在から見た内容に修正してあります。

戸口　民也 (とぐち　たみや)

1946年　神奈川県大和市に生まれる。
1969年　早稲田大学仏文科卒業。
1972年　早稲田大学大学院仏文科修士課程修了。
　　同年、長崎外国語短期大学に赴任。フランス語・フランス文学を担当。
1985年　同短期大学教授。
2001年　長崎外国語大学教授。専攻は17世紀フランス文学・演劇。
　　文科系の情報処理にも大いに関心をもつ。

著書―『パソコンで欧文を書くために』(駿河台出版社、1998)
『パソコンでフランス語、Ouf !』共著(駿河台出版社、1998)
訳書―ジャン・トゥーラ『ヨーロッパの核と平和』(三一書房、1988)
ジャン・トゥーラ『死刑を問う』(三一書房、1991)

パスカルに導かれて　　信仰と生活シリーズ 9

2002年11月21日　第1刷発行

著　者　戸口民也
総監修　平山高明
発行者　藤江憲治
発行所　**くすのき出版**
　　〒870-0829　大分市三芳878番32
　　TEL・FAX 097-547-0741
印刷・製本　佐伯印刷株式会社

乱丁本・落丁本は、小社あてにお送りください。
送料は小社負担でお取り替えします。

ISBN 4-907754-09-4

『信仰と生活シリーズ』　発刊にあたって

一九九八年八月

今日出版されているキリスト教関係の書物を見ますと、神学書や信心書、聖人伝、教育書、小説や詩歌、エッセイ、評論など多岐にわたってそれぞれすばらしいものが刊行されていることが分かります。このような豊かな読書環境にあって、当地の『くすのき出版』が特に読者の方々にお届けいたしたいのは、私たちの日常生活において信仰に合致したキリスト者らしい生き方ができるよう、やさしく実践的に教え諭すような書物です。

私たちがキリストに出会い、その生き方に倣うのは、教会での祈りや秘跡の中だけでなく、一市民として社会人として一日の大半を過ごす職場や学校、家庭、地域社会の中でもあるはずです。キリストの三年間の公生活の前には、ナザレで過ごされた三十年もの隠れた生活、平凡で目立たない仕事の生活があったことを忘れてはいけないでしょう。神の御子イエスは無限の愛をこめて家庭生活の中で、ヨセフの仕事場で御父から委ねられた救い主の使命を果たしておられたのです。

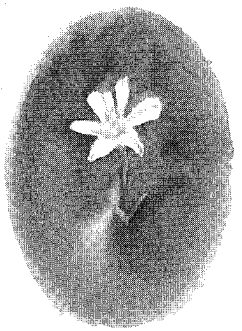
社会に生きる信徒が自己の持ち場ともいえるそのような日常の仕事や家事、様々な人間関係の中で主と出会わないなら、聖化と使徒職の機会を見過ごすことになり、信仰が日常生活から遊離して形だけのものになってしまいます。今、日本の教会が目指している社会の福音化という目標も、信者一人ひとりがいかにキリストと一致し、日々の務めを通して自己と周りの人々を聖化していくかにかかっているといえましょう。

このたび私の監修のもとに刊行される『くすのき出版・信仰と生活シリーズ』が、社会の福音化のパン種となるべき多くのキリスト者に広まり、その霊的生活を刷新し向上させるものであってほしいと願っております。真理のことばがやさしく的確に伝えられるため、執筆者は日本の文化や精神風土に固有な親しみやすい表現を用い、生きた体験に基づく具体的、実践的な勧めを与えるよう工夫しています。私は大分で生まれたこの企画を奨励し、これが教会に仕え、市民社会の健全な発展に役立つ手段となりますようお祈りいたします。

平山高明司教

いのちの輝き

大切な人の希望を支えて



沼野尚美 著

Numano Naomi

平山高明司教 [監修]
B6判　85頁
460円（本体価格）

人生の最後の時をホスピスで過ごす病者たちと、永遠のいのちへの安らかな旅立ちを支える病院チャプレンとの心あたたかな交流を綴った感動の体験記。

信仰と生活シリーズ 8

くすのき出版

くすのき出版

信仰と生活シリーズ

■本体価格です。

平山高明司教 監修

社会人ヨセフ

湯川丈一

B6判・60頁　362円

ナザレの職人聖ヨセフの生涯を通して、日常の仕事のもつ福音的な意義を見つめ、社会に生きるキリスト者の尊い使命を説く。

祈りの小路（こみち）

中井俊己

B6判・90頁　429円

現代の多忙なキリスト者にとって「祈り」とは何だろう。
職場でも家庭でも、街の中でも神を意識し、神と語り合う生活とは。

7人の子をもつ深堀家の母の記録

主婦への手紙

深堀茂子

B6判・100頁　457円

家事や育児の苦労のなかで成長し、「主婦」としての自分の道を見つけた著者が、平凡な結婚生活を通して、神と人々に仕える喜びを語る。

日常生活に愛をこめて

小事は大事

中井俊己

B6判・98頁　457円

どこにいても、だれでも今から実行できる小さな愛の行いの道を、一信徒としての立場からやさしく具体的に語る。

性についての質問に答えて

愛を育（はぐく）む心

酒井俊弘

B6判・75頁　429円

若者と夫婦からの13の質問に対して、教会の教えにそってわかりやすく簡潔に説明し、本当に人間らしく生き愛するための指針を示す。

お母さんの季節

エマオへの道で

廣田道子

B6判・105頁　460円

結婚と出産を機に受洗した著者が、幼い子どもを抱える主婦の視点から、普通の生活環境の中で信仰を生きる若い家族の姿を淡々と語る。

ホスピスの現場からの伝言

愛されて生きる

泉キリ江

B6判・105頁　457円

熊本の「みこころホスピス」で病者の安らぎを願い、良い介護のもてなしに取り組んできた著者が、患者や家族と分かち合った苦しみと喜び、魂の輝きを語る。